

馬介在活動及び療法に参加する児童の特性と保護者の期待 —混合研究法を用いて—

千賀浩太郎^{1,2)*}・鈴木久義³⁾・長島 潤^{1,4)}・渡部喬之^{1,4)}

- 1) 昭和大学藤が丘リハビリテーション病院
- 2) PATH Intl.
- 3) 昭和大学保健医療学部作業療法学科
- 4) 昭和大学 大学院 保健医療学研究科

Parents' expectations about equine-assisted activities and therapies for their children: A mixed-method research

SENGA Kotaro^{1,2)*}, SUZUKI Hisayoshi³⁾, NAGASHIMA Jun^{1,4)}, WATABE Takayuki^{1,4)}

緒言

馬介在活動及び療法 (Equine-Assisted Activity and Therapy 以下, EAAT) に関する研究は, 1970年代におけるドイツの報告を皮切りに, 近年は, 身体機能面の変化に関する報告が多くみられる。本邦での保護者への質問紙調査も散見されるが, 単一施設でのものであり, 複数施設に対して実施した調査は見当たらない。また, EAATの詳細と保護者がEAATに期待することについて, これを直接取り上げてその内容の詳細な分析を行った研究は存在しない。

本研究の目的は, 収斂的混合研究法の観点から, 児童の障がい像や保護者のEAATへの期待を明らかにすることである。

方法/手続き

EAATの参加児童の保護者174名に, 無記名自記式質問紙を配布し, 対象者には, 説明文をよく読み本研究への参加を同意する場合のみ質問紙への記入を行い郵送にて送付することを求めた。なお, 「調査の参加は自由意思である」こと, 「プライバシーは完全に保護される」ことや「調査参加に同意されない場合でも, あなたやお子さんが不利益を被ることは一切ない」ことを記した。質問紙は1) 選択肢を選択させる設問, 2) 自由記述する設問の2種類から構成された。データ解析には, Man-Whitney-U検定を用いて, 有意水準は0.05とした。解析には, JMP Pro 12 for Windowsを用いた。一方, 自由記述された内容の分析には, Berelson, B.の内容分析の手法を用いた。

なおEAATに用いられた馬は, 適正に飼育され, かつ障がい者乗馬用の訓練を受けた個体であり, さらに本研究は昭和大学保健医療学部倫理委員会にて承認を受けた (平成29年5月17日付・承認番号: 第388号)。

結果及び考察

有効質問紙は計52部であった (回収率: 29.9%)。児童は, 重度身体障がいや有する児童が半数と多く (表1), それらの児童は活動頻度や1回当たりの時間等EAATを受ける機会が有意に限定されていた (表2)。一方, 保護者の期待では, 《乗馬を通して得られる効果》として『認知心理面の発達』を期待する記述が最も多く, 次いで『身体機能・能力向上』で特に体

表1 対象児の属性

項目	カテゴリー	mean±SD (Min-Max)	人数 (%)
年齢 (歳)		8.6±4.5 (2-18)	
性別	男性		31 (59.6)
	女性		21 (40.4)
身長 (cm)		119.9±26.4 (80-166)	
体重 (kg)		23.2±12.6 (8-57)	
身体障 害者手 帳	1級		26 (50.0)
	2級		1 (1.9)
	3級		0 (0)
	4級		2 (3.8)
	5級		1 (1.9)
	無し		22 (42.3)

*連絡先: kotarosenga2000@yahoo.co.jp

幹機能向上についての期待が特徴的であった。さらに《乗馬に関する制度や運営への要望》が期待することとして抽出され(表3)、「乗馬機会の向上」を期待した保護者の児童は有意に長期間 EAAT を経験していた(表2)。

今後の EAAT の発展には、保護者の期待が多かつ

表2 各変数を従属変数にした場合の各群間の差の検定

		平均値±SD	統計量(z)	p値
従属変数：ひと月の回数				
身体障害	あり(28)	0.8 ± 0.5	3.53	0.0004
者手帳	なし(21)	2.1 ± 2.0		
従属変数：EAATの一回				
身体障害	あり(30)	21.8 ± 9.6	4.01	<.0001
者手帳	なし(22)	45.5 ± 18.1		
従属変数：経験月数				
乗馬機会	あり(15)	62.3 ± 45.1	2.29	0.02
の向上を	なし(35)	37.3 ± 35.7		

※Mann-WhitneyU検定

た認知心理面・身体機能面へのさらなる対応が望まれる。さらに公的制度的見直し・整備も併せて重要であると考えます。

なお、本研究は平成29年度昭和大学大学院保健医療学研究科修士論文の一部である。さらに、本研究の一部は第52回日本作業療法学会(名古屋市 2018)にて発表した。

謝辞

今回の調査でご協力を頂いた、計4施設のスタッフの皆様、そして回答して下さった保護者の皆様に、深謝申し上げます。

利益相反

本研究に関して申告すべき利益相反関係にある個人及び団体は存在しない。

表3 今後、保護者が「乗馬及び、馬に関連する活動」に期待すること

記録単位	記録単位数(%)	同一記録単一位群	記録単位数(%)	カテゴリ名	記録単位数(%)
心理的・情緒面の発達	4(5.2)	1-1 認知・心理面の発達	17(22.1)	1. 乗馬を通して、得られる効果	52(67.5)
やさしくなること	4(5.2)				
自信を持つこと	2(2.6)				
思いやりを持つこと	2(2.6)				
集中力の向上	2(2.6)				
落ち着きを得ること	1(1.3)				
精神的安定	1(1.3)				
職業としての選択肢になること	1(1.3)	1-2 身体機能・能力向上	15(19.5)		
体幹機能向上	9(11.7)				
身体能力向上	1(1.3)				
筋の使用	1(1.3)				
姿勢維持	1(1.3)				
座位の獲得	1(1.3)				
感覚の獲得	1(1.3)	1-3 馬との相互作用の機会を得ること	8(10.4)		
視野の拡大	1(1.3)				
動物との相互作用の機会を得ること	2(2.6)				
生命を尊重すること	2(2.6)				
手網操作を通してのコミュニケーション向上	1(1.3)				
動物を好きになること	1(1.3)				
動物への慣れ	1(1.3)	1-4 社会的スキルの獲得	6(7.8)		
乗馬と環境変化に慣れること	1(1.3)				
表現力の獲得	2(2.6)				
指示を聞いて守ること	1(1.3)				
世話など責任を持つて行うこと	1(1.3)				
他者との関わりの向上	1(1.3)	1-5 余暇活動の獲得	6(7.8)		
主体的な行動の獲得	1(1.3)				
乗馬自体を楽しむこと	3(3.9)				
ストレスの解消	2(2.6)				
余暇活動の獲得	1(1.3)				
乗馬頻度の増加	9(11.7)	2-1 活動の継続や乗馬時間・乗馬機会の増加	23(29.9)	2. 乗馬に関する制度や運営への要望	25(32.5)
活動の継続	7(9.1)				
施設・設備面の要望	3(3.9)				
乗馬イベントの増加	2(2.6)				
乗馬大会の増加	1(1.3)				
障がい者乗馬の普及	1(1.3)	2-2 行政への要望	2(2.6)		
行政のサポート	2(2.6)				